



論叢 松下幸之助

第13号
2009年10月

《論考》

- | | | |
|--|------|----|
| 松下幸之助・透徹の思想(四)
——「PHPの原理」と幸之助哲学 | 青野豊作 | 2 |
| 「物をつくる前に人をつくる」論考
—— 企業者論・松下幸之助研究(六) | 大森 弘 | 25 |
| 自転車店主・五代音吉と奉公人・松下幸之助
—— 明治末期の自転車小売業の実態と雇用関係 | 渡邊祐介 | 41 |
| 松下幸之助と生長の家
—— 石川芳次郎を介して | 川上恒雄 | 71 |

《資料》

- | | |
|-------------------------------|----|
| 松下幸之助関連資料 (2009. 1. 1～ 6. 30) | 95 |
|-------------------------------|----|

松下幸之助と生長の家

— 石川芳次郎を介して

川上恒雄

1 はじめに

松下幸之助は生前、さまざまな宗教団体・運動と接した一方、特定の宗教に深く関与することもなかった。「PHPのこぼし」¹や「人間を考える」²などで描いた世界観（人間観および宇宙観）³は、幸之助がさまざまな宗教あるいはその周辺思想と接しつつ、自分なりに考え出したものだと思われる。ただ、接した宗教や思想が多様であるとしても、それらがすべて幸之助の世界観に反映していることはいだらう。人がだれでもそうであるように、意図的ではなくとも結果として自分の価値観に合うような宗教や思想を選択しながら、徐々に自身の世界観の枠組みを固めたり修正したりしたのだと思われる。本稿は、幸之助が（無意識的かもしれないが）取り入れた宗教の一つが生長の家であったのではないかとこのことを考察する。「あったのではないか」という断定を避けた表現は、幸之助自身が「生長の家から影響を受けた」とは発言していないからである。しかし、本稿は、影響関係を推察しうるだけの根拠と解釈を提示する試みで

ある。

幸之助の宗教とのかかわりという点、従来は主に天理教あるいは真言宗の影響が指摘されてきた。天理教については、前半生の自伝『私の行き方考え方』⁴から、幸之助が一九三二年（昭和七年）に天理教（同書では「某教」とし、教団名を伏せている）の諸施設を見学して、立派で清掃の行き届いた建築物や信者の生き生きとした奉仕活動の姿に感銘し、物資の豊富とそれによる人間の精神的安心をめざした「産業人の使命」に思い至った経緯が、よく引用される。真言宗については、大正末期に取引先の山本商店の顧問役として幸之助と出会い、のちに松下電器の社内祭司となった加藤大観が真言宗醍醐寺派僧侶であることと、生地の和歌山県に真言密教の聖地である高野山があることがあげられる。ただ、幸之助が戦後に著した世界観と、天理教や真言宗のそれとのあいだにどのような関係があるのか、教義やイデオロギー面から考察した研究はほとんどない。

そのほかに、筆者はかつて本紀要で、新宗教や一部の近代仏教運動との関連を指摘した研究を短く論評した。これらの研究は、幸之助の世界観がいかなる背景に由来しているのかを、新宗教の生命主義

